

石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第7巻 第2号



オオフクロフリソデダニ (ケタフリソデダニ科)

・白山自然保護センターの裏山に、以前に出作りの人が植えたオニグルミの林があります。この林内の土壌にも、このオオフクロフリソデダニが生息しています。

体長0.6mm、8本の足で土壌の中を歩きまわりながら、ササラダニ類の他の種類と同様、落葉の腐りかけた部分を食べています。

ササラダニ類の中の高等な種類には、体の両側に翼状のものが付いていることが多いのですが、このオオフクロフリソデダニにも、その名のとおりフリソデのような翼が付いています。土の中にいるのに、空を飛べそうな翼があるのはふしぎです。何のためにこの翼があるのかは、まだ判っていません。

(星野 宏一)

白峰村のお地蔵さん

若杉 温・三枝 幸裕

今年の1月中旬に白山を訪ね、白峰村のお年寄りから、焼畑の出作り地での生活と麓の村での生活について、聞き取りを行いました。限られた紙数なので、調査結果を全部御紹介することは出来ません。そこで村人の信仰生活の中で特に顕著な地蔵信仰について、なるべく具体的に述べてみたいと思います。

一般に白山麓は真宗地帯と言われ、稲荷や弁財天あるいは地蔵といった庶民の小さな神様に対する信仰はないとされています。現に1日目にお訪ねしたお寺の住職さんは、「早生した子供の魂がまた帰って来るといった信仰がありますか」という質問に、「ここらは真宗地帯だからそういう類の信仰は一切ない」と言われました。

ところが『白峰村史』を覗いて見ますと、けっこう雑多な小さな神様に対する信仰のことが書かれています。特に険路などに守護神として地蔵が祀られている例が数多く見受けられます。ことに注意すべきは、これらの地蔵のうちに、出作り小屋の産土うぶすな神的性格をもったものがあることです。そこで2日目は、そのことを中心に聞き取りをすることにしました。話者は今年数えて85歳になられる長坂吉之助さんです。

まず葬制のことに関連してお聞きしたのですが、生れて1ヶ月位で死んだ赤ん坊は土葬にしたそうで、それは一生を未だ終えておらず、また生れて来ると信じられていたからとのことでした。それは真宗の教義に反しま

せんかと聞きますと、反しないと答えられ、このように考えられた理由は、この辺りは真宗以前に天台宗が盛んで、その名残りからそのように信じられていたのだらうということでした。真宗には阿弥陀仏以外の神仏を排斥する考えはなく、阿弥陀仏を信ずれば、全ての神仏を信じたことになると考えていたそうです。つまり阿弥陀仏が全神仏を代表していると考えていたのでしょう。そしてこの乳児が死んだ場合は一般に幼児の魂の守護者といわれる地蔵を祀らぬそうです。再び帰らぬ死者の回向のため地蔵を祀るのであったら、生れ変わって来ると考えられた乳児の死に際して、地蔵を祀らぬのは当然のこととされます。死者の回向のための地蔵は、河内谷の天狗壁にある与三よそまつ松地蔵の例があります。これはここで道路工事を行っている時に、土工の与三よそまつ松という人が事故で亡くなったのを祀ったものです。また2、3年前にも、用水に落ちて子供が亡くなり、地蔵を祀った例がある



左が白落神社神体だった地蔵尊、
右は不動様という

そうです。今でも地蔵の信仰には根強いものがあると思われます。

次に同じく地蔵の信仰でありながら、上述の例と異なる型として、さきあげた峠などの険路に祀られる地蔵があります。そこが危険な場所であることを知らせ、注意を通行人に促す、険路の守護神的な性格をもった地蔵です。『白峰村史』によると、この型に属する地蔵が最も多く、20を数えることが出来ます。若干、例をあげると、河内方面では小原峠や杉峠、河内谷方面では屏風壁にあり、明谷では小又谷に、風嵐では新保峠、小糸峠にあります。また、大道谷方面では、中野俣峠、スゲヤケ峠、護摩堂峠、旧道谷峠などにあり、桑島方面では西島峠、下田原峠などにあります。

今一つ特に興味深く思われるのは、出作り地の何戸かの仲間で祀っていた地蔵で、これは地下の白峰本村で言えば、産土神にあたる性格をもっています。長坂さんの出作り小屋のある苛原いらばらの神様の場合には臼落神社うすおとしと呼ばれ、御神体として地蔵を祀っていました。即ち、出作り地の守護神としての地蔵の例です。毎年5月10日には地域の人々が祭りに集まり、共同飲食をしたそうです。この型に属する地蔵としては、河内谷の大空山の石休場の地蔵、風嵐谷の岩屋にある地蔵、明谷分校の南にある昭明堂しょうみやうどうに祀られた地蔵、桑島の小赤谷の地蔵などがあげられます。

長坂さんの居た苛原いらばらの産土神的な地蔵であった臼落神社の御神体は、今では白峰本村

の八坂神社に祀られています。そこで、実際に八坂神社を訪ね、その地蔵様を写真に収めて来ました。なるほど地蔵様には相違ないようですが、座った姿であるというのが気にかかります。仏を神として祀る。即ち神仏習合の跡と見受けられます。おそらくは長坂さんの言通り、天台宗の名残りなのでしょう

もう一つ、わずかに2つ例が数えられる型に、雪崩除けの神として祀られた地蔵があります。白峰本村の南番上道の藪清水やぶしやうずの神様と同じく南番の梶畑神社です。両方とも地蔵を御神体としています。

以上の如く、白峰村の地蔵は大きく分けて



加越国境，峠道の地蔵

1) 死者の回向のための地蔵、2) 険路の守護神としての地蔵、3) 出作り地の守護神としての地蔵、4) 雪崩除けの地蔵の4つの型に分類出来ると思います。このように、多様で特異な地蔵信仰が生れたのは、その背景として白峰の厳しい自然の存在を考えざるを得ません。

(筑波大学歴史人類学系)

カムリ A 群

—この夏の話から—

水野 昭憲*・滝沢 均**

今春、4月下旬私たちは残雪が陽光に輝く中宮温泉へやってきた。ジライ谷野猿公苑ではニホンザル、カムリA群が私たちを歓迎してくれる。この時すでに12頭のアカンボウが生まれており、母の胸にしがみついていた。白山では4月から6月にかけて出産がみられ、今年は次々に子どもが生まれ、6月下旬までかかって、成熟メス42頭のうち36頭までが産んだ。この中には初産と思われる約5頭も含まれている。

高い出産率

1度に86%ものメスが産むということは、各地のサルのこれまでの報告をみても極めて珍しいことだ。新生児は1年近く母の乳房を吸っているため、この間はメスの発情が抑制されて、次の子を妊娠することはない。このことはほ乳動物に一般的にみられ、育児のためには大変合理的にできているわけだ。したがって、サルでは通常一年おきに出産をみることが多い。今春の異常に高い出産率については、何人かの人から「暖冬だったからでしょう。」とか、「餌付けをしたからでしょう。」とか聞かれたものだ。たしかに昭和54年の冬は、積雪量では昭和28年以来、1月上旬の平均気温では明治19年以来の観測史上初（金沢市）のまれにみる暖冬異変だった。また餌付けの影響については、京都岩田山のサルが毎年つけて産むメスが増えてきたという話もある。

しかしよく考えてみれば、今春産んだサルは昨年秋にすでに交尾し、厳冬期には妊娠

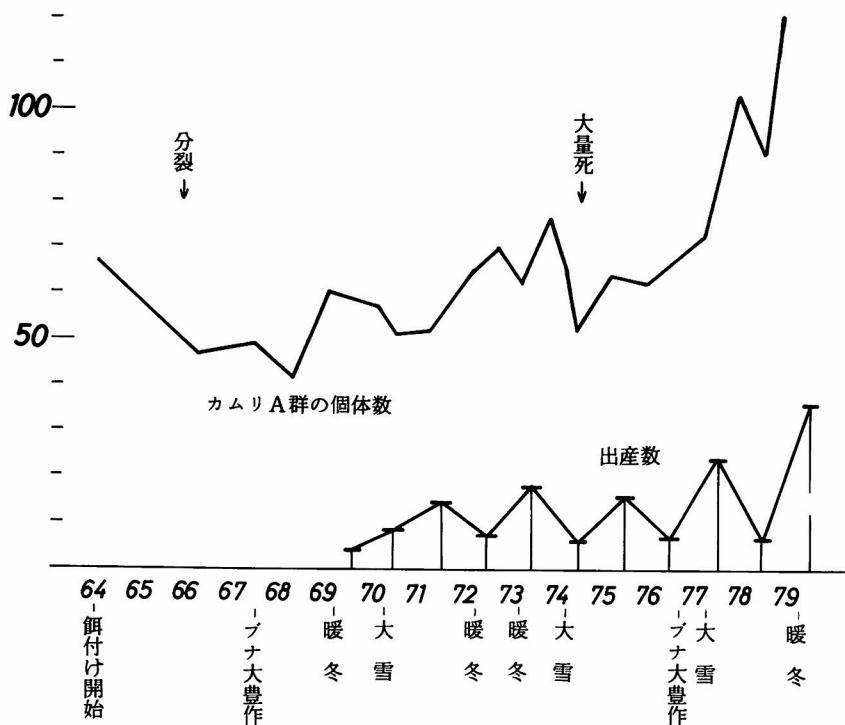
中期に達しているため、冬の寒暖はそれほど大きな影響を及ぼすものでないことは察しがつくだろう。そこで一昨年からの出産数をみると昭和52年に25頭、昨年は6頭であった。つまり昨年秋の発情期にはほとんどのメスがアカンボウを持っていなかったわけで、当然のことながら受胎率も高くなった。こうしてみると来年は再び出産数が少なくなることが予想される。つまり群れ単位で見ると、1年おきにアカンボウの多い年があることになる。実際にカムリA群の出産数の経年変化は明瞭な波になっている。おもしろいことに、子供が多く生まれる年は白山だけでなく、他の地方のサルの群れでも同じ傾向がある。さらに、粟津温泉の柵の中で管理人の与える餌だけに頼っているサルにおいても、出産数が昨年少く、今年多かった。

今のところ、何が原因で、あるいは何がきっかけで、このような波ができるのかは明らかにされていない。私は、秋になる木の実の周期的な豊凶作と関係があるのではないかと考え、検討をはじめている。

誤解されているサル社会

昭和39年に餌付けが開始されて、今年で15年になるカムリA群で、リーダーと呼ぶ群れの中で最強のオスは、マサムネ、ベツウ、ミョウホウ、サブロウ、アクタロウ、サイゾウ、カクゾウと交代してきた。

カムリA群はしばしば地元新聞にとり上げられ、季節の話題として、またリーダー交代は動物社会のおもしろさを提供してきた。ス



クラブブックからいくつかの新聞の見出しを拾ってみよう。「カクゾウ政権の座サル一統率力、精彩欠く」(昭和54年8月)、「ただいま82匹一角造、政権なんとか保つ」(53年7月)、「カムリA群ピンチーベビー急増、均衡崩す」(53年4月)などがある。これらを見ると、人間と同じように常にボスが話題の中心とされ、政権という語が随所に出てくる。

これらの背景には、世界にさきがけて餌付けによって進められたサル社会の研究があった。順位制、リーダーの行動、群れの同心円構造などは実に明確なものであったが、集中した餌に集まる餌場において顕著に見られる社会のモデルであることを忘れてならない。ところが人間社会と照らし合せてみても大変興味深いこともあって、す早く一般に普及し、教科書にもとりあげられるようになったのだ。

しかしながら、自然の中のサルの群れ構造は、それらのモデルだけで把握できるものではない。あまりに擬人化してとらえられているために、サルに対して一面的な見方しかで

きなくしていることが心配になる。野猿公苑の来苑者と接していると、最も多く、まず最初に発せられる質問は、ボスはどれか、どうやって統率しているか、といった類のものである。これでは権力者指向という人間の側面でしか見ていないことになる。

リーダー交代

梅雨どきは、彼らの好む軟かい植物が山に多いので、カムリA群はあまり餌場へやって来ない。群れは標高650mのジライ谷野猿公園からはなれた、途中谷やシリタカ谷の奥、標高1000m以上の山中にいる。

7月5日、久しぶりに群れが餌場へやってきた。ところが120頭の群れにならず、25頭ほどしかいない。リーダーであったカクゾウの顔はなく、第3位のオスだったダンディーがグループを率いている。アカンボウをつれたメスが4頭、昨年電線にひっかかって火症したのがもとで右手を失った3オオスも入っている。これまでに時どき群れと別に餌場へやってきていたはなれオスも何頭かいる。



火症から右手を失った3才オス「デンバー」

このグループは3日間続けて餌場へ現れ、本隊は来ないので、あるいは分裂かと思わせた。4日目の7月8日、この分派群が餌場にいた時、カクゾウを中心とした75頭の本隊が餌場へやってきた。分派群と本隊との間に短かいにらみ合いがあり、分派群は餌場から追い出された。ちょうどこの時居合せた、私や一般来苑者に対し、追われたオスたちが歯をむき出して向ってきた。しばらく興奮が続いたが、かみついたりすることはなく、やがて一頭一頭森の中へ消えていった。分派群にいたメスやコドモたちは本隊に残って何もなかったように餌を拾っていた。

この一連の動きは、オスたちが精神的に不安定になった徴候だったのだろう。7月14日には群れのリーダーだったカクゾウが群れをはなれて1頭のワカモノを連れて現れ、17日には、1頭だけでやってきて群れと合流した。そしてついに18日以来カクゾウは姿を見せ



7月から姿を消した前リーダー「カクゾウ」

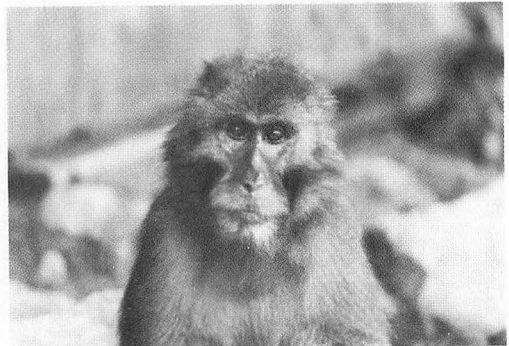
なくなってしまった。

こうして群れの1位から4位までのオスが群れから離れてしまった。普通リーダーの交代やオスの離脱は、順位争いに負けることがきっかけになっているとされてきた。しかし今回の群れの変動をみる限り、そのような激しい争いは観察されていない。また今回出ていった4頭を見ると、8才から14才の、いわば中年オスであった。精神的な負担や複雑さから逃避したと考えたほうが理解しやすい。

オスのリーダーシップは他個体が、サルが持っている集合性によって、追従し、まつり上げられるのではないかと、とも言われてきた。つまり、サルのオスは「ボスの座」を争うという権力指向というものを持っていないと考えるのである。そのように見える部分があったとしても、オスどうしの中で強弱を認めあうことから、間接的あるいは結果として表現されてくるものなのだろう。

カクゾウが去ったあと、群れにはこれといった力のあるオスはいなくなった。その段階では、リーダーはどうなるのか見当がつかなくなった。それまで周辺部にいた「ボク」と名づけていた10才くらいのオスが餌場を中心に入ろうとしはじめた。はじめはメスにも時には追いはらわれていたが、次第に力をつけてきて、ようやく9月になって他のどの個体よりも強いと認められるようになった。

しかし、ボクは、よく言われるリーダーと



カムリA群内の唯一のオトナオス「ボク」

しての行動をほとんど示さない。リーダーの役割として、警戒と防衛、誘導と遊牧、とりしまり、などがあげられているが、ボクは、どれについても顕著な行動を示さない。リーダーの統率というのはサルの群れ社会にとって、生きていくために不可欠のものではないとはいえまいか。それは、餌場という群れの凝集した時によく目につくということなのだろう。これまでにやや常識化しているリーダーの役割りは再検討を要する。それは広く一般人の間にあるサル社会への誤解をとき、いろいろな観点から、自然の中のサルを観察しようということにつながると信じる。

アカンボウの生と死

5月18日、ジライ谷の餌場へ、生まれたばかりでまだ乾ききっていない、へその緒と胎盤をつけたアカンボウを抱いたメスが、群れの最後尾について来た。モミジと名づけたこの若メスは初産らしい。長いへその緒が子に巻きつき、キーキー鳴くのを、何ともたどたどしい手つきであやしていた。出産は早朝のことが多く、産み落してすぐに抱いて歩いていく。その1日はへその緒をつけたままであることが多い。

アカンボウはすぐに手足で母の腹にぶら下がって移動するようになる。生後20日ほどで歩くことができるようになるが、つかむ力の強いのに比べて歩く足どりがしっかりするのは4ヶ月ほど後になる。その頃には母親から離れて、アカンボウだけで遊ぶようになる。白山では8月頃になると、子どもがレスリングをしたり、木の枝先からつき落ち合うようなかわいらしい光景を見ることができる。

盛夏の7月28日、エムエと名づけているメスがアカンボウの死体を抱えてきた。この子は24日から右足を怪我して、27日にはぐったりしていたものだ。それから毎日母親は死体をかかえて餌場へあらわれ、来苑者の



子の死体を抱いて移動する「エムエ」

注目を集めた。気温の高い時なので2日もすると死体は異臭を発し、ハエが集まってくる。周囲のサルはそれを避けるようにし、母はハエを払いのけるのに忙がしい。4日間死体を持ち歩いてきた母も8月1日にはそれを離してきた。

他の野猿公苑の観察も合せてみると、アカンボウの死因の多くは怪我である。岩から転落したり、母の腹にしがみついているものが、母親が石から石へ飛んだ時に頭をぶっつけるものなどがある。

母親が死体を持ち歩くことは決して珍しいことではない。前にも8日間持ち歩いているのを観察した時には、死体はボロ布のようになり、骨も見え、手足がちぎれていくまで離さなかった。

この行動を人間の感情にみられるような、悲しさとか、愛情とかで考えることはできないのでなからうか。母ザルにとっては、乳を吸い、腹についていたアカンボウは自分の身体の一部であり、あえていえば愛着がある、と見たほうがよかろう。おもしろいことに、母親が死んだ場合と死産の場合には、すぐに母子の認識を失ってしまうといわれている。

子を失ったメスたちは、11月には発情して来春再び出産するだろう。32頭のアカンボウたちには、離乳しようとするところへ、まだ知らない厳しい冬がやって来ようとしている。 (*研究普及課, **金沢大学理学部)

<蛇谷の地質解説>

4. 蛇谷の滝と崩壊

東野外志男*・山崎 正男**・竹中 修平***

蛇谷の地形の特徴

これまで3回にわたって、蛇谷の地質についておはなししてきました。今回は、<蛇谷の地質解説>の最終回として、これらの地質が蛇谷の地形や景観にどのようにあらわれているかを考えてみたいと思います。

白山林道からみる蛇谷の景観には、2つの面があるといえましょう。中宮橋近くの料金所付近から第一ヘアピンまでの道は、峡谷の底近くを走っています。そこから見られる谷の景色がその一つです。植生に乏しい急な岩壁が、高くそびえています。第1ヘアピンから先は、道は第2ヘアピンへと蛇谷の北斜面をのぼってゆき、山々の眺望はみるみる開けてゆきます。第2ヘアピンカーブを回り、やがて県境付近に達すると、白山の山頂部を遠方に望めます。この雄大な眺めがもう一つの面です。

はじめの峡谷の岩壁を眺めながらゆく時、その景観にひときわ色どりを添えるのが、次々にあらわれる滝の姿です。下流からシリタカ滝、赤石の滝、岩底の滝、^{かまそこ}かもしか滝、^{うば}姥ヶ滝（親谷の滝）、^{みずのり}水法の滝（^{じょう}尉ヶ滝）、^{ふく}瓢箪の大滝と名がつけられており（滝の位置は、本紙第6巻第3号<蛇谷の地質解説>3.を参照して下さい。）、それぞれに個性をもって我々の目を楽しませてくれます。これらの滝の名はそれぞれにいわれがあり、滝を流れる水の様子が老婆が白髪をふり乱しているのに

似ていることから、その名がついた姥ヶ滝は特に有名です。

これらの多くの滝を見て気が付くことですが、どの滝も枝谷が本流と合流するところにかかっているということです。林道からは直接見ることはできませんが、地質調査などで支流をさかのぼってゆくと、小規模ではありますが、枝谷との合流点で滝に巡り会うことが多くあります。本流には滝らしい滝はほとんどないのに、なぜこのように枝谷との合流点に滝がつくられるのでしょうか。

滝のでき方

滝がつくられる要因はいろいろと考えられますが、蛇谷にかかっている滝については、次のような理由がその主な原因と思われます。1つは枝谷にくらべ本流の水量は多く、その

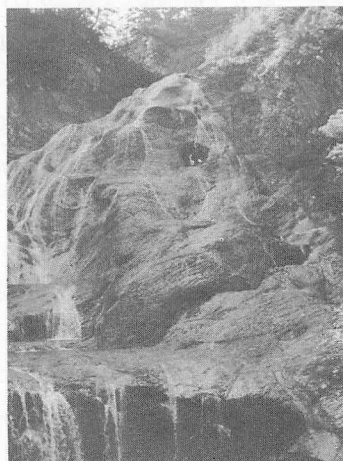


写真4-1 姥ヶ滝

ため谷を深くえぐる侵食の力が本流のほうが枝谷にくらべ大きいということです。合流点で、その侵食の差が滝となってあらわれるわけです。

蛇谷溪谷をつくる岩石は主に蛇谷層の溶結凝灰岩です。この岩石は他の地層の溶結凝灰岩にくらべ、片麻岩や花崗岩などの石質岩片が少なく、そのかわりに、侵食に弱い火山灰のしめるわりあいが多く、それだけ削られやすいといえます。このことが本流と枝谷との侵食の差をなお一層大きいものとしたのでしょう。また、前回に述べたように、いろいろな固さの岩石がほぼ水平に重なっているということも、急崖の滝をつくる一つの要素になっているようです。

これらの滝をもう少し詳しくみてみると、姥ヶ滝や赤石の滝のように、急ではありますがむしろ急湍なんに近い斜面をもったものと、シリタカ滝や瓢箪の大滝のように、落差が大きいくほとんど垂直な滝があることがわかります。このちがいは、どうも滝をつくっている岩石のちがいによるようです。

姥ヶ滝(写真4-1)や赤石の滝の場合は、本流、枝谷共にほぼ均質な溶結凝灰岩からで



写真4-2 シリタカ滝



写真4-3 瓢箪の大滝

きていて、本流と枝谷との侵食の差のみが、これらの滝をつくる原因になっています。枝谷でも本流近くになると水量も多くなり、合流点で本流との侵食量の差により滝をつくるわけですが、それ程の差はできず、シリタカ滝のような垂直な落差の大きい滝をつくる程にはなりません。

姥ヶ滝で見られるように斜面の途中で段ができているのは、同じ凝灰岩の中でも、侵食に対する低抗力の差があるためだと思われます。岩底の滝、かもしか滝、水法の滝も、形こそ少しずつ異なりますが、姥ヶ滝などと同じようにしてできたと考えられます。

一方、シリタカ滝(写真4-2)や瓢箪の大滝(写真4-3)の場合は、均質な溶結凝灰岩の他に角礫岩がはさまれています。この角礫岩は溶結凝灰岩にくらべて流水による侵食に対しては強いのですが、くずれやすい性質をもっており、このことが、落差の大きい垂直な滝をつくる原因になったように思われます。岩壁の根元を構成する凝灰岩層は、滝壺でうずまく水により深くえぐられ、その上部を構成する角礫岩層はとり残されます。しかし、そのうちに角礫岩はくずれ、急な崖を

つくります。つまり、本流と枝谷との侵食の差に、角礫岩のくずれがプラスされたものです。

シリタカ滝や瓢箪の大滝は本流からかなり奥まったところにありますが、これははじめ合流点付近にできた滝が、しだいに現位置まで後退してきたためと思われます。つまり、現位置に後退するまで、凝灰岩の侵食と角礫岩のくずれが何回も繰り返してきたのでしょう。

崩壊と断層

数年前、第1ヘアピンより少し上流のところで、岩壁の一部が大崩壊をおこしたことがあります(写真4-4)。崩壊地の下には小さな家ほどもある大きな岩塊がうず高く積み重なり、崩壊の凄さを物語っています。



写真4-4 蛇谷の崩壊地

蛇谷地域には、規模こそさまざまですが、このような崩壊があちこちで見られます。これは1つには風化や侵食に弱い溶結凝灰岩が多いということや、柱状節理をなす岩層や角礫岩などのくずれやすいものが多いということにも起因しますが、いまひとつ大きな理由は、この地域に大小さまざまな断層が多いと

いうことが挙げられます。

断層とは、地層が外部からの力により割れ目ができ、その割れ目を境にして地層がくいちがうことです。地層がくいちがうときに泥や小礫が割れ目にできます。そのため、割れ目かもろくなっています。

林道沿いでは、第1ヘアピン近くの第5号隧道でみられる断層(写真4-5)が代表的

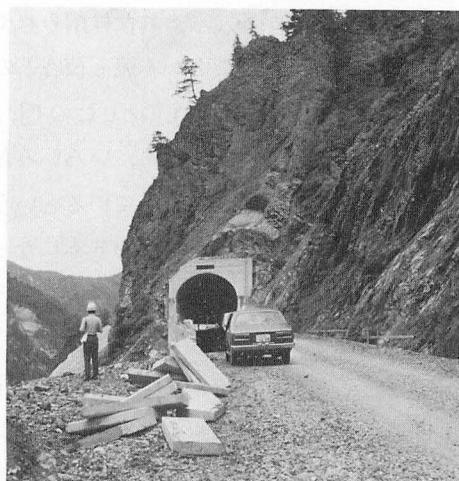


写真4-5 第5隧道の断層

ですが、その他にもところどころに大小の断層がみられます。これらの断層は北西—南東方向にほぼ平行に走っており、蛇谷地域の岩石はあたかも刺身のように切り刻まれているようになっています。ですから、その割れ目に水がしみ込んだり、何か他から力が加わったりしたりすると、もともとが弱いところですから、そこから崩壊がはじまるというわけです。

このような崩壊の激しい地域にトンネルや道をつくるのに、非常な困難を要したことは十分にうかがえます。しかし、今後もこれらの断層などにそって崩壊が生じることは予想され、なお一層の注意が必要と思われます。
(*研究普及課; **金沢大学理学部; ***名古屋大学水圏科学研究所)

山日記

白山の登山道は現在、石川県側から砂防新道、観光新道、別山一市ノ瀬道（チブリ尾根）、釈迦新道、中宮道、岩間道、楽々新道があり福井県側からは鳩ヶ湯新道、岐阜県側からは平瀬道、白山北山稜線（三方岩岳—ゴマ平）、石徹白道いとしろがあります。これらの登山道の維持管理は各県で行っていますが、石川県では、54年は弥陀ヶ原歩道改良工事として3千万円、岩間道、楽々新道、中宮道、展望歩道等に867万円の補修工事がなされました。また毎年、登山道維持のための草刈り等を白峰、尾口、吉野谷の3村に委託しており、54年は総額142万円になっています。（岐阜、福井両県では、地元山岳会や大学のワンダーフォーゲル部等の奉仕作業によっているところが大きいようです。）

さて、このように意外に手のかかる登山道ですが、その数やコースは現在のままでよいのかどうかといった問題がたびたび関係機関の間で討議され、公園計画の見直しが5年ごとになされています。現在の公園計画は53年に策定されたものですが、この中には今は廃道同様の青柳新道や、白山スーパー林道の工事開始以来通行できなくなった蛇谷新道等いくつかの幻の登山道があり、地元の村や登山者から整備を要望する声がかなり聞かれてもいます。しかしまた、白山の自然を保護するためには登山道の数を極力減らすべきであるとの主張も聞かれます。ここで私たちはもう一度、登山道というものについて考えてみる必要があるのではないのでしょうか。

私は、山に登ることによって自然に親しみ、さらに自然の偉大さやそのしくみを知ることによって自然保護の必要性を認識できるようになると考えます。つまり、昔は信仰と精神修養の山であった白山を、今は、雄大な生きた自然教育の場であるにとらえるのです。これは、我々の自然保護センターを含めた白山地域を Open Field Museum（野外に開かれた博物館）と考えるものです。そうするならば、登山道はそのための重要な手段となるわけでありますから、より一層の整備と充実が計られなければなりません。（これは白山に限ったことではなく、また誰れもがその目的と体力に応じて利用できるものが必要です。）登山道は、お花畑や湿原の中の道はともかく、林道等に較べれば、自然に与える影響はごく小さいものです。しかし、その登山道を歩く多くの人が自然を愛する心を育ててくれるなら、それは自然保護にとって大きな力になるでしょう。

錦の衣をまとい始めた白山を、そんなことを考えながら歩きました。

（庶務課 榎 典雅）



殿ガ池ヒュッテと観光新道

たよりに

夏山登山シーズンが終わりました。今年は7月下旬から8月上旬のピーク時に長雨があり、登山者が少なく、ひどい混雑はありませんでした。春山から9月までの登山者数は30,380人と去年同期より約1割減となっています。別当出合駐車場は今年から夏山の土・日曜に限って有料（普通自動車700円）となりましたが、利用者も良く理解していたようです。7、8月の有料利用台数は1,312台でした。

加賀地方の約70万人の水がめになる手取川ダムが、この6月から湛水を開始しました。これまでに水深で約半分まで貯水が進んでいますが、すでに多くのプランクトンが発生し、濁りが目立っています。白山自然保護センターでは、衛生公害研究所などと共同し、ダム湖の生態系の調査を始めました。今後、プランクトン、魚、水質などを続けて見ていくつもりです。

前号で予告したとおり、7月22日より、センター展示室内にて特別展「化石が語る太古の白山」を開催しています。白山周辺から産するシジミ・タニシなどの動物化石、シダ・ナギ・ソテツなどの植物化石を展示しました。白山では始めて描かれた約1億4千万年前の手取の森の復元図が大変好評を得ています。夏休み期間中多くの来館者があり、7・8月だけで約1万8,000人が訪れています。

特別展の解説を中心に、ガイドブック「白山の自然誌—手取統の化石」（B5版22頁）を作りました。御希望の方にはお分けしています。

特別展も含め中宮温泉の白山自然保護センターは11月9日まで開館しています。

目次

表紙	オオフクロフリソデダニ	星野 宏一	1
白峰村のお地藏さん		若杉 温・三枝幸裕	2
カムリA群—この夏の話から—		水野昭憲・滝沢 均	4
蛇谷の地質解説	4		
蛇谷の滝と崩壊		東野外志男・山崎正男・竹中修平	8
山日記		梅 典雅	11

はくさん 第7巻 第2号

発行日 1979年10月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村中宮
印刷所 株式会社 橋本 確文堂
